1951　昭和２６年１２月１日発行　　鶴研
雑誌　新映画　１２月　２頁
映画出版社
見出し［お人よしの好漢 鶴田浩二くん］　筆者［文野京助］　P1

特集 現代映画スタア五十人集　花束をおくる

## お人よしの好漢 鶴田浩二くん　　文野京助

長近めきめきと人気が出て某誌の投票ではナムバー・ワンとなったが、芸界生活は長い。松竹京都の子役俳優を振り出しに、戦後も高田浩吉劇団で地方廻りをやったり、撮影所の大部屋に埋もれたりして辛酸をナメている。それがプラスにもなっているし、マイナスにもなっているようだ。

近ごろの二枚目スタアは非常に油ッ気がない。自分の素地で行ける淡彩なフンイキ映画なら、なんとかゴマカシが利くが、テクニックを要する役になると実力の半分も出せないのが多い。インテリ特有のハニカミやテレ性も邪魔をするらしい。戦後女優には京マチ子のような体当り戦法のスタアもいるが、若い二枚目にはそれすらもいない。

そこへ行くと鶴田には遅疑逡巡が少ない。自分の持っている実力をわりかた出している。浜松生れだが関西育ちなので、笠置シヅ子や長谷川一夫に通じる芸人気質が無用の気取りや迷いを封じているのかも知れない。その代り、デリカシーとかセンシブルな風格に欠けるものがある。松竹がギャング・スタアにしたり、時代劇に使ったり、快男子型の若旦那にして、彼のタイプをいまだに模索しているのも、そのためであろう。

しかし、松竹の彼に対する態度には、どうも深い愛情がないように思われる。人気があるから、今のうちにさんざん使っておこうという腹で、彼を大成させようという誠意がないように見えるのは筆者だけのヒガ眼であろうか。彼の将来を思えば、もっと腰をすえて「芸と人間」を計画的に洗練させなければならない筈だ。それは映画会社にありがちな出来合い品の使い捨て根性か、或は鶴田自身にそうさせるものがあるのか。業者と技芸者の間は、みんなこんなものだが、この場合も両方に言い分があるように思われる。映画スタアにスポーツの監督のような強力な指導者があれば、もっともっと人材が正しく育成されるにちがいない。

鶴田は若い、人間として、演技者としても訓練の余地を多く残している。いくら天分があっても、本人がこれを知っていなければ進歩を期待出来ない。ところが、これを知っても素直に充実への道を辿れないのが、戦後の青春でもある。彼も少年期から青年期へかけて、あまりにもイヤなものを見てきたようだ。世代の悲劇である。それが世の中をアマく見させたり、無性に噛みつかせる場合も想像に難くない。アプレアプレと馬鹿にするが、その責任はアヴァン・ゲールの映画人にもある。

彼は元来がお人よしの好漢である。しかし、それが正しく評価されないで、大船へ来てからは、兎角異端児扱いされて孤立しているのは、彼の子供ッぽい擬態と噛みつき精神によるものだろう。またそれを助長させるだけの因襲とセクショナリズムが松竹の東西搬影所にわだかまっているのも事実である。どっちもどっち――というところが偽らぬ軍配であろう。思うに鶴田はぬくぬくと順境に育って来ず、さりとて苦労にも徹して来ず、中途

半端な「世間知り」から中途半端な反逆児や天の邪鬼になっているようだ。それを世代のギャップに浮かんだ稚気として温かく抱擁してやれば、人間としての厚味も出てくるかも知れないが突き放してしまったら、ますます依固地のスネモノになってしまう。

今の彼は表面の擬態のうらで非常に淋しがっているにちがいない。――が芸に生きるものは、しょせん孤独のものである。変に安易な徒党を組んで、お山の大将におさまるよりは、むしろこの際、この孤独をギリギリのところまで追いつめることを彼にすゝめたい。孤独の底の奥底からこそ、鶴田の自己凝視と、人生と芸に対する深い洞察が生まれるものと信じる。

さっぱりとした気のいゝ男だがほんとうの意味での、俳優の慾と近代生活をまだ知らない。適度に大船調のアマさはあり、松竹に向いたスタアだが、それに落ちつく意志がないらしい。来年は『飛び出した若旦那』を地で行くかも知れない。

**略歴**

大正十三年十二月六日。浜松に生る。本名小野栄一。関西大学卒。昭和廿三年、復員後小学校時代から師事していた高田浩吉劇団に入座。同年暮、松竹京都の大曾根監督に認められて入社、「遊俠の群れ」に初演。以後「エデンの海」「黒い花」「怪塔伝」「東京のお嬢さん」「飛び出した若旦那」等に主演している。最近作は「あの丘越えて」。現住所は神奈川県鎌倉市大船町一二六。